The TIME is NOW

源流の郷

VOL.01
2021.07

全国源流の郷協議会

吉野川・紀ノ川源流域（奈良県川上村） 写真：田丸瑞穂

MESSAGE

全国源流の郷協議会は平成17年11月、河川の最上流である源流域に位置する自治体が源流域の森林保全や地域存続のために集結し設立いたしました。源流域の自然の素晴らしさや大切さを発信するために「源流サミット」開催、「源流白書」発行など、これまでさまざまな活動に取り組んできました。平成29年には源流域の自治体だけでなく河川流域の自治体も加入できる「源流を守り、国土保全を推進する市町村連盟」を立ち上げ、流域の自治体との連携にも取り組み始めました。さらに令和2年3月には「源流を守り、国土保全を推進する国会議員連盟」が設立され、源流の危機は国土の危機という認識のもと、源流基本法制定を目指し活動が進められています。

日本の源流域は国土保全、環境保全の最前線に位置しています。その多くが分水嶺近くの豊かな森林地帯に存在し、水源地としてきれいな水や空気など多くの恵みを私たちに与え続けています。近年の地球規模で進行する自然環境の悪化や度重なる自然災害を考えると、源流域の自治体が担う役割と責任はますます重要になってきていると言えるでしょう。しかし現在、全国各地の源流域では急速な過疎化や少子高齢化が進行し、自治体の経済基盤も脆弱となり、源流域の暮らしや文化を維持することが危うくなってきています。源流域の自治体だけではもはや源流域の自然を守れない、つまり国土と環境の保全が難しい時代を迎えているのです。源流域の危機は、その河川の水を生活資源とする流域の危機となり、そのまま下流域の都市部の危機へとつながります。今こそ私たち協議会は、源流域の重要性をもっと多くの皆さんに理解していただけるよう、日本全国に源流域を守る協力の輪を広げていく活動をしていかねばなりません。

この度、源流の郷の未来を考える冊子「The TIME is NOW」を発行いたします。コロナ禍、森林の荒廃、線状降水帯による集中豪雨、度重なる土砂災害、河川の氾濫など、これまでにない時代となったなかで、源流域の私たちができることは何か。源流域に目を向けてもらい、国土保全を訴えていく。まさに“今がそのとき”である。冊子のタイトルにはそんな意味を込めました。源流域を守る活動が地域や世代を超えて支持され、より多くの人たちに合流いただけるよう、全国源流の郷協議会は“源流域を守る意義”を発信し続けていきたいと思います。

全国源流の郷協議会
会長 **舩木直美**（山梨県小菅村 村長）

源流域の水と森、その価値を広める

OUR ACTION ―上下流域連携
水のつながりを絆に

源流域の価値は、まずは同じ水を共有する
その河川流域で暮らす人たちに知ってもらうことが大切だ。
水源地である源流域を守ることの必要性を、どうやって広めればいいのか。
さまざまな上下流域連携の取り組みにチャレンジする
自治体の話から活動のヒントを見つけたい。

ESD活動

持続可能な開発のための教育活動。教育関係者に源流セミナーを開催し、その学びを広く伝えてもらっている。

水源地の森ツアー

「森と水の源流館」が行うガイドツアー。吉野川・紀の川の源流域の素晴らしさを学ぶ。

森と水の源流館

ここを拠点に源流域に関するさまざまな活動が行われている。

学校間交流

和歌山市加太小学校と川上村の小学校との交流。自然の大切さや流域のつながりを子供たちが学ぶ。

流域連携イベント

川上村では流域最下流である和歌山県和歌浦漁港の“しらす祭り”にも参加。水源地としての存在を広めている。

奈良県川上村

啓発活動の拠点を作ることが大切

吉野川・紀の川の源流域である奈良県川上村は、平成14年、公益財団法人吉野川紀の川源流物語を設立し「森と水の源流館」を建設。環境学習や体験プログラムの提供などを行い、誰もが気軽に源流を学べる場所を作った。川上村水源地課の加藤満氏は「役所の仕事ではなく、源流域のことだけを専門的に活動する公益財団法人を整備したことは大きい」と語る。源流域啓発の拠点ができたことで活動の輪が広がり、その後、流域すべての自治体で協力関係を構築。お互いのイベントに参加し合うなどの交流が続いている。

川上村が考える流域連携は単なる交流にとどまらない。平成29年より、奈良教育大学を核とした教育機関や学習施設が参加する近畿ESD※コンソーシアムに参加。持続可能な社会づくりの担い手を育む教育活動の拠点となった。同じ源流を持つ奈良県と和歌山県の小学校の先生を対象に水の恵みをテーマとする“森と水の源流館授業づくりセミナー”を開き、学校での子供たちへのSDGs学習授業に役立ててもらっている。

「環境教育は成果まで時間がかかる。経済効果もわかりにくい。でも川上村に関心を持つファンを確実に増やすことができる。流域の子供たちへの源流教育は、源流の郷ができる未来への投資だと思う」

※ESDとは、Education for Sustainable Developmentの略。

長野県木祖村

経済交流から流域治水の信頼関係に

愛知県や岐阜県、名古屋市の水源となる味噌川ダム完成をきっかけに連携を強めたのは木曽川流域だ。ダム運用開始直前の平成8年、渇水に苦しむ下流域のために木祖村は試験湛水を緊急放流。以降、流域連携の大切さに注目が集まり名古屋市に木祖村出張所を開設するなどの交流が続いている。平成23年には名古屋市が中心となり木曽川、揖斐川、長良川の木曽三川流域連携が実現。経済交流から始まり、現在は集中豪雨等の対策として治水や森林整備など防災面でも連携する。インフラを担う水道企業団や電力会社とも連携し、多面的に源流域を守る意義を共有している。

流域連携の成果を上げる木祖村だが、課題もある。親交の深い下流域（都市部）から農産物や木材活用の提案を受けても産業の担い手不足で対応できないことがある。そこで注目したのが森林環境譲与税。木祖村産業振興課の高柳政次氏は次のように語る。

「木祖村だけの話ではなく、全国の下流域の自治体への交付金をその源流域のために使ってもらうことを提案したい。下流域が源流域の木材を活用するサイクルができれば、全国の源流の郷は経済が安定し雇用も増える。経済面で源流域を守ることは、下流域の安全と環境を守ることにつながると広く伝えていきたい」

味噌川ダム

木曽川流域連携の要となる味噌川ダム。標高1130メートルの高地に建つダムだ。

名古屋市
上下水道局との交流

「サマーとりっぷin木祖村」や「水源林保全体験研修」など、さまざまな交流が行われている。

木祖村
アンテナショップ

名古屋市での活動拠点となっている。

東海地区木祖村人会

源流体験ツアーや物産展を実施。会員には木祖村ファンになった村外出身の人たちも多い。

にっしん市民まつり

流域の自治体の中でも愛知県日進市との交流は深い。

源流体験は源流域の子供に誇りを、下流域の子供に学びを提供

旭川源流域である岡山県新庄村では、夏冬2回「源流体験エコツアー」が行われている。最下流域の岡山市京山地区の子供を対象としたもので、毎回、キャンセル待ちが出るほどの人気ツアーだとか。岡山市京山地区ESD・SDGs推進協議会会長の池田満之氏は流域交流の大切さを次のように話す。

「京山地区の子供が源流域に興味を持ったきっかけは川の汚れ。都市部の汚れた川を見て源流域はどうなっているのかと考えたわけです。新庄村へのツアーに参加した子供は源流域には守るべき素晴らしい自然があることを学び、その水のきれいさを下流域においても保ち続けたいという意識を育みます。子供には何より実体験が必要なのです」

また新庄村の受け入れ担当、黒田眞路氏（國六株式会社取締役所長）は、自治体だけで難しければ企業や協力者の知恵や力を借りて、源流体験を始めてみることも大事だと語る。「新庄村のツアーは源流域の子供たちも一緒に参加する点がポイントです。下流域の子供が源流域を自然豊かな素晴らしい場所だと思うことで、源流域の子供は自分の村を誇りに感じる。源流体験は源流域の子供にとっても誇りを見出せる貴重な機会です」

写真：黒田眞路氏提供

［ふるさと納税］

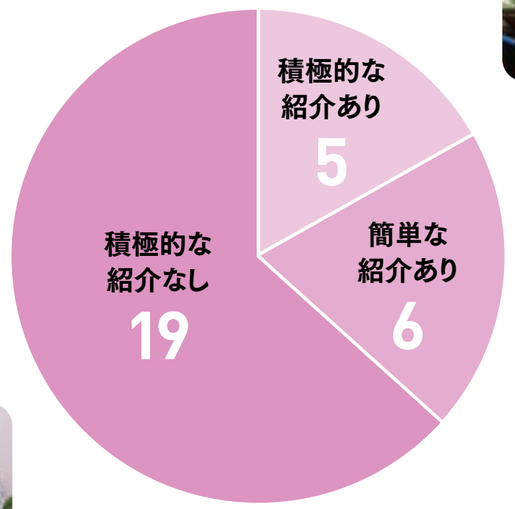
源流域の魅力と価値、紹介する？ しない？

山梨県小菅村

「FAR YEAST BREWING
源流ビール6本セット」

高知県津野町

「四万十川源流 草木染めスカーフ茜」
「四万十川源流水使用 田舎豆腐（3丁セット）」



協議会加盟30自治体において、ふるさと納税サイト内の自治体情報で、源流域の自治体であることを積極的に記載している割合（The TIME is NOW 調べ）

愛媛県松野町

「水際のロッジ宿泊チケット」
「森の国トーチ」

奈良県上北山村

「入漁券（鮎・アマゴ・うなぎ）」

全国源流の郷協議会に加盟する自治体はすべてふるさと納税対象だ。今や自治体の運営にふるさと納税は欠かせないが、この仕組みをうまく活用して源流域の存在を広く知ってもらうためにはどうすればいいのだろうか？ ふるさと納税サイト「ふるさとチョイス」広報担当 田中絵里香さんにお話をうかがった。

「ふるさと納税というと返礼品に注目が集まりがちですが、最近はテーマや使い道がはっきりしているものを寄付先に選ぶ傾向が出てきました。自分が寄付しようとしている自治体がどんな課題を抱えていて、何にチャレンジしようとしているのか。そこを知ることで寄付への気持ちが違ってきます。“お得”だけで寄付先を選んだ人は、別の“お得”があれば気持ちが移ってしまい、本当のファンになってくれない。ふるさと納税という仕組みを使って自分たちの市町村のファンを増やしていけるよう、源流域の魅力と価値、源流域を守る取り組みをアピールするのはいいと思います。

ふるさとチョイスでは、返礼品から寄付先を選ぶふるさと納税とは異なるGCF（ガバメントクラウドファンディング®）という仕組みもあります。GCFは自治体が抱える問題解決のため、寄付金の使い道をより具体的にプロジェクト化し、そのプロジェクトに共感した方から寄付を募る仕組みです。例えば源流域の課題や取り組みを伝え、共感してくれた寄付者に源流域を感じさせる品を届けるというストーリーも素敵ですね。体験型の返礼品も人気ですから、源流体験などは注目されるかもしれません。コロナ禍でリアル体験が無理でも、オンライン体験ツアーを企画してファン作りに成功している自治体もありますから、いろいろなやり方を検討してみて欲しいです。

返礼品競争も落ち着いてきた今、ふるさと納税対象自治体は“競争よりも共創する”時代になっています。大切なのは寄付者に共感してもらうことです。源流域の自治体が連携して、共通の課題、取り組みに共感してもらえる情報を広く届けるのもいいですね」

全国各地の源流域を訪ね歩く「源流探検隊が行く」 Supported by GLOBERIDE

森から海へと運ばれる“水と鉄”。源流域を守る理由がここにある

フィッシングの「DAIWA」で知られるスポーツ関連企業「グローブライド」では、2017年より「森林が育む豊かな水」と冠したコンテンツを自社サイトで展開している。これまでの約4年間で18都道府県26の源流域の自治体を取材。コロナ禍で現地取材が叶わない時期は森林や水に知見を持つ有識者に取材を重ね「豊かな森が水を育み、いのちを育む」というメッセージを広く伝えてきた。

実は、取材を続ける中で常に気になっていたことがある。このメッセージには明確な答えがないということだ。「森を守る、水を守る」、「誰もが、そうすべきだ」と分かっていても、なかなか答えが見つからないジレンマを感じていた。それは、これまで河川の恩恵を受けてきた源流から下流域までも、源流域を守らなければならない理由を説明できなかったからではないだろうか。

しかし、この4年間ほどの取材を通して、一つのキーワードを見つけたと思っている。

それは“鉄”。

源流域を守る理由はここにあるのだ。

地球上のほとんどの生き物は“鉄”がなければ生きてはいけない。光合成や血流など生命維持に必要なメカニズムに“鉄”は元素レベルで不可欠な役割を果たしている。その“鉄”の供給源が、まさに源流域の森林であるという事実。この事実こそ、源流域の森と水を守る明確な理由、そう答えとして広く認識されるべきではないだろうか。

森と水を研究する第一人者、北海道大学名誉教授で水産科学研究者の松永勝彦氏によると「森林の腐葉土から生まれた鉄（フルボ酸鉄）は川を流れ海に注ぎ、植物プランクトンや海藻に鉄分を届ける※」のだ。ここから食物連鎖がはじまり、多くの生き物に“鉄”が行き渡り、私たち人間も生きていくことができる。下流域の河口近くで生き物が豊富なのは、森林から川を通じて鉄（フルボ酸鉄）が運ばれてくるためだ、と松永教授が教えてくれた。

もちろん、この鉄（フルボ酸鉄）は源流域の森林だけでなく湿地や有機肥料を使った水田にも含まれているが、山・森林・湿地・水田・海、これらすべてが源流域から水を通してつながっていることを考えると、その源である源流域の森林を守らなければならない理由がはっきりしてくるはずだ。

いのちを育む“鉄”の源は源流域の森林にある。源流域を管理する自治体はこの事実を誇りと考え、未来に残して頂きたい。そして、源流域から流れる豊かな水の恩恵を享受するすべての人たちに、この事実を届けたいと思う。

「森林が育む豊かな水」
～源流の郷、全国各地の源流域を訪ねて～
2017年4月より連載。「全国源流の郷協議会」ご協力の下、日本各地の源流域を訪ね、源流域に位置する自治体の取り組みや課題を取材している。（文中※に関する詳細は、第76回に掲載）

https://www.daiwa.com/jp/fishing/be_earth/genryu/index.html

森林土壌ではバクテリアが落ち葉や枝などを二酸化炭素と水に分解。その際、分解されずに残った有機物質からフルボ酸という腐植物質ができる。このフルボ酸は金属と結合しやすいため、鉄分と強く結びついて超微細粒子「フルボ酸鉄」となる。

Infographics／HIROKI MASUDA
©GLOBERIDE

森と水を守る活動を応援するグローブライド

GLOBERIDE
A Lifetime Sports Company

世界有数のフィッシングブランド「DAIWA」で知られるスポーツ関連企業「グローブライド」は、フィッシングを主力にゴルフやラケットスポーツ、サイクルスポーツの4事業を手がけている。2009年に「ダイワ精工」から社名変更した「グローブライド」には、地球を舞台にスポーツの新たな楽しみを創造し、スポーツと自然を愛するすべての人に貢献したいという思いが込められている。

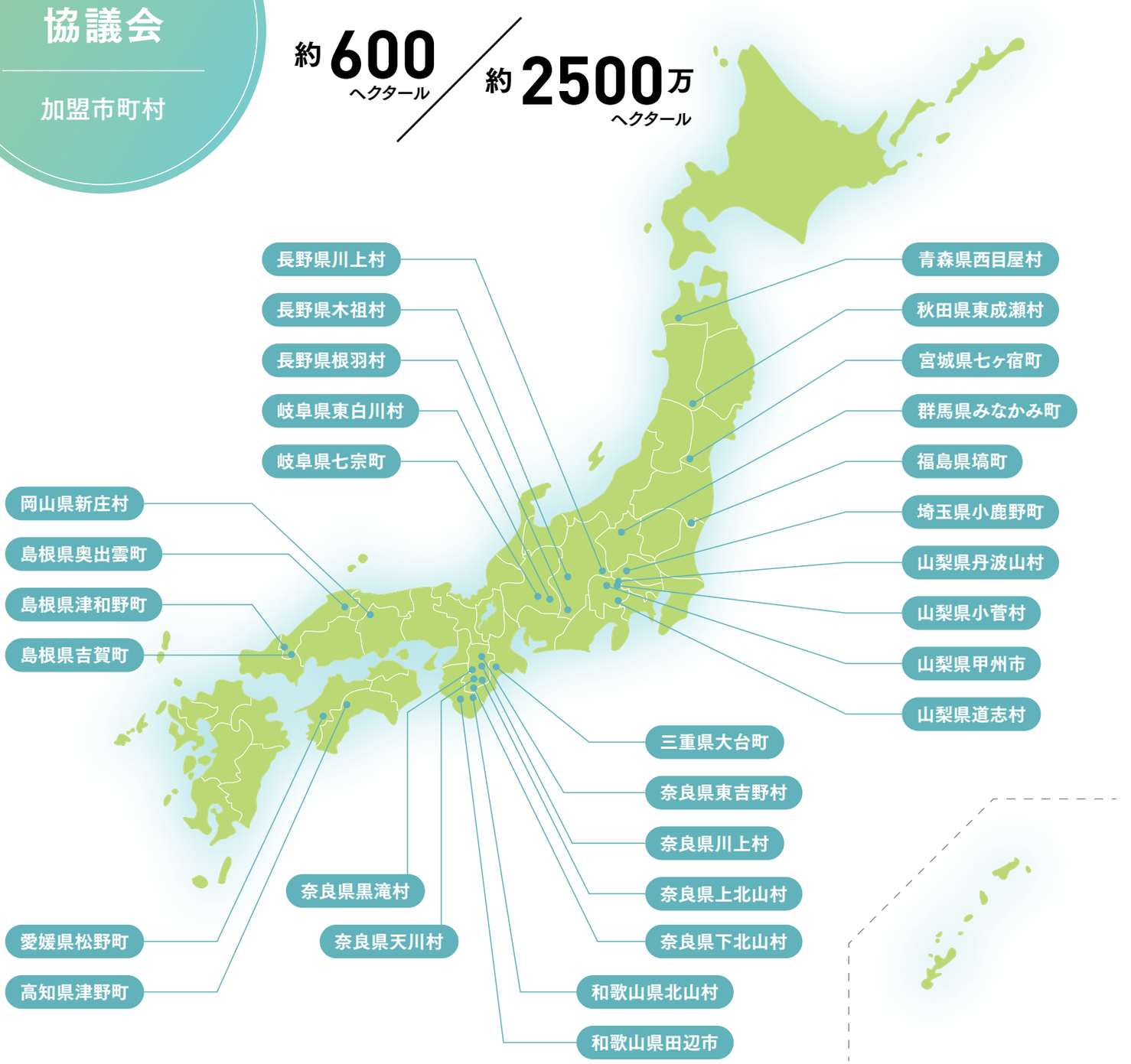
人生に豊かな時間を提供する「ライフタイムスポーツカンパニー」として、グローブライドはアウトドアスポーツ・レジャーの未来を拓いていく。

全国源流の郷協議会

加盟市町村

日本の森林総面積に占める
源流の郷が保有する森林面積

約600ヘクタール ／ 約2500万ヘクタール



2021年新規加盟自治体

山梨県丹波山村

東京都と山梨県の県境、多摩川源流域に位置する丹波山村は、日本百名山に数えられる雲取山を始め、飛龍山、大菩薩嶺など秩父多摩甲斐国立公園に属する山々に囲まれた村です。村の森林のほとんどが多摩川水源涵養林として保護されています。

福島県塙町

豊かな自然に囲まれた塙町は東部に阿武隈山系、西部に八溝山系が連なる町で、一級河川久慈川の源流の郷です。町の中心部をゆったりと流れる久慈川は「鮎の里」としても有名な清流で、解禁シーズンには県内外から多くの人が集まります。

2021年7月現在

全国源流の郷協議会　事務局
小菅村役場　源流振興課　〒409-0211　山梨県北都留郡小菅村4698　TEL.0428-87-0111

表紙写真：多摩川源流域（山梨県丹波山村）